

D—7 姑問題の基線と現実 ——家政学的分析——

羽衣学園短大 実野 利久

家政学とは家族および家庭生活ならびに家政のあり方を研究する知識と技術の学問であると定義される。より望ましい家庭生活を追求し創造することが家政学の使命である。

妻と夫の家族との問題、姑と嫁の關係に集中されるこの問題の解決は、現実の家庭生活の安定と向上を任務とする家政学の立場から見て具体的実践的な課題である。

嫁の忍従にその解決を見出すことはできない。しかし、現代の姑は時代の不幸を背負っていることも忘れてはならない。法律や倫理の立場からの分析では問題は解決しない。家政学の問題として総合的観点に立って分析しなければならない。

分析視角を確立するために、姑問題に関する意識調査を試みた。とくに青年層（主として大学生）を対象として質問紙法による調査を実施した。大阪のS女大、H短大、名古屋のS短大の女子学生250名に、大阪のF大、名古屋のN工大の男子学生250名を対象とし、現代インテリ青年の家族意識に姑の存在がいかにかに投影しているかを追究した。科学的アプローチは「である」という客観的な事実の認識を基礎として出発しなければならないと考えたからである。その結果、姑問題が決して過去の問題でないことを知ったのであった。そしてこの問題の解決のため諸科学の成果を摂取して、家政学がその中核となって努力しなければならないことを提唱するものである。